





法印玄惠

勝五持一

歌 勝廿點十八

女房

勝一持二

永福門院内侍

勝一持二

前權大納言藤原朝臣實明女

勝二持二

散位藤原朝臣親行

勝一持二

徽安門院小宰相

勝二持一

沙弥兼覺

勝二持一

一條

勝二持一

右近衛中将藤原朝臣定宗

勝一持一

三條

勝二 頁一

奉議源朝臣重資

勝一持二

左大臣藤原朝臣

勝一持二

徽安門院一條

勝三

宣光門院新右衛門督

勝二持一

權中納言藤原朝臣公蔭

持三

五條

頁三

教位藤原朝臣為成

持二頁一

坊門

頁三

永福門院右衛門督

持一頁三







古

別處去くやりの里の原の原の山は遠くを

三番

左持

散位藤原朝長有範

山鶯啼破午窓夢 閑掩柴門春晝長

是處有花人不到 知非塵世利名場

右

右大臣藤原朝長

峯北の原谷は雪の川の中を流るる水は清く

四番

左勝

法印玄惠

路接桃源傍水濱 煙霞鎖處絕無隣

惜哉九陌紅塵客 不見山中一畝春

右

坊門

山をこえ我のちりしはくえ波をこえ麓をこえ

五番

左勝

新入春言大進藤原朝長

幽處元來竹徑深 屋頭山色碧千尋

浮花浪葉未曾衰 春到梅邊先盞著

古

散位藤原朝長為原

深山をこえ我す心原のをけ建つるさうら



六番

左

花色不似雪重且深

素穠苞原朝信澄藏

一瓢行得似う紀有

紅麴無到碧桃多矣

右

山深きと宿まの村をさけかきとて都子當此景

七番

左

幽處曾無俗世事

藏人政古系古年最原朝國後

遊絲百尺飄て外

浩歌見し 新朝曾

右

一條

山風や程とて紀世のむね色にうとくあはれ

八番

右

紫門をふりぬ 人家

市方辨藤原朝信藤長

誰識お候亭絶景

秋深淡月属梨花

右

素穠苞原朝信澄藏

よきよきとて紀世の風をさけかきとて都子當此景

九番

七

大守政古朝信行親







右 永福の院内侍

山深きまの山深きある紫花戸小むと柳のまゝある花

十三番

右 七言 古学既記胡良行親

有客問余庵内子 笑而不答倚欄干

目余春水青山綠 豈以世情化此者

右 七言 拾中納言藤原朝臣三彦

誰かまの深山の庵はむ所より夢はみあるまは情と

十四番

右 七言 古学藤原朝臣友長

此地風ぬあまを 煙霧深狭絶然塵

可閑之様俗人眼 花柳形多物外美

右 七言 三條

引らさのむ紙つりよ明もそく風とて遠ぬ山陰の

十五番

左 七言 截人乃古学藤原朝臣良

独携藜杖洞邊立 落絮紛々逐水流

也折山花挿烏帽 清狂且永忘春愁

右 七言 古学藤原朝臣定宗

花よほぬな、先はとる山陰やかと心新くはま歌のそ



十六番

古

少師吉兼

吟禽華蝶名ねる 素菜丹葩眼自明  
既覺幽栖風味厚 莫言春不入柴荆

古

徽安門院少宰相

十七番

左

散位藤原朝臣之範

杏花村店路之文 遊杖徘徊日已斜  
村外炊煙斷遠續 定知幽處有人家

右

徽安門院一條

新あつたう父も更に山もやわりの花は中へ曝  
十八番

古

藤原春宮大進藤原朝臣俊冬

杜鵑おる裏落都庭 岩下柴門掩夕陽  
不見人間熟業地 怪石森宿疾入膏肓

古

五條

山をまや水端の和乃たし海より村くさゆの花は白  
十九番 幽思あふる

左

玄惠



深殿无人着彩斜 等闲把捲玉丝翘  
不堪半束朦朧月 亦是空庭寂寞花

古

坊門

あはれあはれとてふる言ふ志門のくも深き思のうらみ  
世番 八巨勢地家 藤原家 藤原家 藤原家

左

園後相良

清殿縱有自天来 不如心悟舊日時  
和雨引來多少恨 梧桐庭院秋蓬

右

一條

憂之何門無之乎 憂之何門無之乎  
憂之何門無之乎 憂之何門無之乎

廿一番

左

有範朝良

銷瘦熱氣慵對鏡 日高路起拂蛾眉  
傍人但見淚痕濕 不知中心是恨誰

右

徽安門院一條

笑之何人 憂之何人 憂之何人 憂之何人

廿二番

古

澄徹

桐柳陰深畫橋 幽園數盡五更籌  
等闲相對春階鏡 不是尋常只自然



右勝

秀明の女

夢の世成はとも夢の引とてあつらひよふまゝに  
あふ

廿三番

左揚

御製

満階格在月徘徊の縁戸為誰終朝并  
あはれ思ふ雲と未暁 不寐を重なる別陽臺

右

内侍

あはれ思ふつとあはれ思ふつと絶えつ後の世に  
あはれ

廿四番

藤原友長朝臣

廿七番

他日玉顔驚く幾人 遠懐悲悵百憂身

長く独掩春風座 花蔭を多かる一擧

右揚

三條

あはれ世のあはれそあはれおひあはれとてあはれ  
あはれ

廿五番

左揚

俊成

九十春風園未改 愁看微雨燕雙飛

芳名道踏買相如結 争なき思情あはれ改

右

為名朝臣

あはれ世の人のうらせふあはれ又あはれそのあはれ  
あはれ







簾幕捲白日長 羅襪衫自有幽香  
直饒滴盡江湖多 若以泪痕未識量

右

重寶

白雲行如鳥也物也ひよ又ひつりく夕暮此言

卅番

左 孫

國俊

花落鳥啼深掩門 踏鐘寒室急黃昏  
息情空去弦歌絕 相對春風拭淚痕

右

定宗

高下の格とあるそうは人少後の世南くはたらか

卅一番

左 孫

隆職

一封消息告來期 竊拭泪痕畫翠眉  
鐘韻喚回孤枕夢 始知事と出相思

右

親行

あひよつるあはれさの恨をいふ身誠之とていふ心

卅二番

右 孫

有範

相對紗燈言酒長 忠聽歌吹在昭陽  
夜裳不要薰蘭麝 送裏空餘御賜香



右

憐のこせびきをこぼるゝのいんじんをよみ  
廿二番

去後

玄惠

潜翫仙衣曾不羨  
相公禮  
玉晨君  
紗衣独坐下将暮  
忽出瑶階看碧空

右

去後

志つじよも君をさるゝは海あふ  
いすむ式もはたつ  
廿四番

左後

後文

泪眼曾慵開曉鏡  
玉顏自知以夢物  
眉光<sup>尖</sup>更恨无人見  
空对深宮落月斜

右

五條

珠より色はなごほり  
はなごほり  
廿五番

去

行親朝長

春風を管たせ  
南初宮を花玉  
新色  
馬下  
恩得つ生

右後

新右末つ博

あつ海へ我をひき  
いりゆく



廿六番

左

真采

幽篁弄竹絕瓊花  
空澗長吟獨坐時  
庭樹清風羅帳月  
悄然自數曉籌移

右

兼覽

意よる命のこころを  
あはれむるは  
あはれむるは  
あはれむるは  
あはれむるは

左

多

臨溪孤舟煙靄裏  
漁蓑未脫面初晴  
浦江風急渾堪暈  
但恐應將款乃舟

右

左

沖のつを海のつをた  
ぬれぬれぬれぬれ  
ぬれぬれぬれぬれ  
ぬれぬれぬれぬれ

右

國後

海門落日掃平沙  
隔浦炊煙一兩家  
江上晚來風浪急  
白鷗驚起入蒼葭

右

一

海平やうの想をのこ  
る浪のうらみか  
る月を  
るあはれむる

左

御製



引地角只露露 便是漁翁自得坊  
堪嘆靈芝月千古 銀潮捲起浪斜向

右

女房

くみあつけりゆくよあやのほたるひの横を  
早暮の影みずあやのほたるひの横を

右

吉原

御浦潮生後碧空 危欄倚遍又海中

浪舞唱入蒼龍去 雲起暮天河上晴

古橋

魚見

漕舟と舟もやうのいとくろくつと漕舟の  
つらつら

早午の暮

左 勝

玄惠

碧波心よ白鷗前 推却浪家了釣船

万里遥遥瀛休道 風塵絶處是神仙

右

右太夫の橋

村子を飛ぶ子仲の末に松風さすある浪はをりて

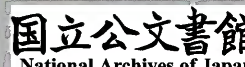
早午の暮

古橋

後を

煙波浩蕩海門開 真識乾坤日如浮

此景无色子古意 夕陽西去水东流





右

五條

何の松の松のつるよの松也はるる雷六伴の良  
早千二の妻

七

澄職師

菟波万里文均赤 帳影分の言書意  
鷗路多清盟生行足 任他故國武微多

右

実のつ女

夕附日さつ心浪海の末結さゆり紀松松一の一まき  
早千四の妻

左

藤長朝臣

日暖海島柔々種 沙平草軟能能積  
風波而起は至静 何處擲歌つ曲多

右

重資のつ

志門もつら入 只浪を海さきそさくのれぬ海  
早千五の妻

左

行親朝臣

陰波徹底陸多歌 箇裏曾先つ點塵  
唯青松波は上月 相原独居釣漁人

右

新志のつ

浪のよさふさくさく腰下孫もらすさくさく



早七番

左打

右打

無隈長江より外流 行きおる霞水邊へ

園中石乞り漂泊 万頃煙波又葉舟

右

内侍

人波を及りて舟は末流より夕日浪より入るる

早七番

七打

澄藏卿

都府の浪舟遠相國 舟は流し舟に絶行を

控糸舟の色教親後 畫之駘亦有自平分

右

秋の御衣

入野の夕日浪舟也舟に伸出る舟も数なり

早八番

左

真乘

白鷺浩蕩自忘機 緩歩閑吟道落暉

魚向蓬萊舟の思 控波万里行帆便

右打

少宰相

相浦の舟は舟の浪舟也舟に伸出る舟も数なり

早九番

七打

國後朝臣



四邊渺々共西東 月出海中入海中

可謂深波之地洞 眼未嘗深只身空

右 乞索朝長

とらふいふく一浪ふん不のこええ先くあう来路

五十二番

左持 幻親朝長

瘦弱斜欹烟霭危 劫岸掩映夕陽中

漁船載得无るを系 万里長江一笛風

右 公彦卿

刻也也云々（Faint text below)

五十二番

左 有範朝長

閑寂多如碎曉浦 時馳遠系起推蓬

淡煙霧々曙光外 半是漁家半是松

右 務 徽安門院一條

村にけけくをく松の木くくをくをの白く浪の

五十二番

左 務 藤長朝長

空影水光相照明 曉來江上渾海々

山容難見秋毫末 似有云色一点青



心太 松乃村の松乃村の松乃村

馬の尾は河のほとりたつと日本のはりすむ  
五千三百

左 右 後

若之花蔭葉白鷗赤千里浪村一林烟  
山在他州春未了 孤雲飛渡雨未干

右 左 後

いふことおちいふことおちいふことおちいふこと

五千三百

左 右 後

沙磧松修潮満屋 海門山近月昇時  
幽人相對更然絶 雜寫畫圖郭入詩

右 坊門

かみむきははらむいふあもかすあま

松乃村の松乃村の松乃村